放課後子ども教室事業

自治体名

岩手県紫波町

学校数

小学校　11校　中学校　3校

震災後の地域の状況・仮設住宅数

地区公民館が中心となって、被災地から移住した住民との交流会を開いたり、被災地へ手作り味噌を寄贈するなどの活動をしている。（震災による被害：軽傷1、建物被害多数（倒壊2、天井落下2等）、道路地割れ2等）

＜取組名＞　～放課後子ども教室理科実験～

取組概要

実施形態（該当に○）	自治体単独実施	団体等との連携実施	大学との連携実施	（連携している団体等・大学の名称）
	○			
実施主体・場所等	**コーディネーター数**	**ボランティア延べ人数**	**年間実施日数（回数）**	**活動場所**
	0	1	2	中央公民館

活動内容

※該当する内容に○

学校支援	学習支援	部活動指導	美化・環境整備	登下校指導	学校行事・その他
					（　　）
学校と地域の協働学習	復興学習	防災教育	伝統文化・芸能	職業体験・キャリア教育	イベント・行事・その他
					（　　）
放課後等支援	学習支援	体験・交流活動	遊び・スポーツ	児童クラブとの連携	その他
	○	○	○		（　　）
家庭教育・保護者支援	家庭教育講座	親子参加行事	サロン・相談対応	家庭訪問相談	その他
					（　　）
地域課題に応じた学習・交流	高齢者支援・世代間交流	心のケア・健康管理	生活再建・地域づくり	地域人材育成	その他
					（　　）

＜取組の内容を具体的に記載＞

社会教育指導員の指導の下、子どもたちに工作を含む理科実験を体験させ、震災後に重要性を痛感することとなった科学的に考え行動する力を育むことを目的に開催した。

具体的には、ペットボトルとしょうゆ入れを使った浮沈子、フランクリン沸騰器によるてのひら沸騰実験、ライティングボール（弱電離プラズマによる発光）を使った人体のアース実験を行い、「ハンドパワー」の威力を驚きをもって知った。どんな時も人間の持つ「ハンドパワー」を信じて頑張ること、一方、不思議な現象も科学的に解明ができていることに気付く機会としたかった。また、傘袋を使ったロケットづくりでは、それぞれが自分の創造性を生かしてロケットを仕上げ、より遠くへ飛ばす工夫をしながら、楽しく遊んだ。机上の論理ではなく、生の体験をさせることで子どもたちから何度も「楽しい」との感想が返ってきた。

学校での理科教育では、子どもたちは知識としては教えられても、実際にそれを実験・経験するということが少ない。頭で理解しているだけのことと、実際に自分のものになり役に立つ応用的な知識になっていることとは全く違う。今回は、震災に限らず困難に遭ったときに大事になる「実際に体験し実験することで体感する」ことを学ぶ機会とした。

取組の変遷

準備段階

◇被災による課題

かつて子どもは異年齢集団での生活や様々な体験活動、そして行事や自然の中での遊びを通じて社会性や道徳性を身につけて心を育ませていた。しかし現代では地域で子どもが仲間と走り回って遊ぶ様子は見られなくなりつつあり、家でごく少数の固定化されたメンバーとそれぞれがゲームをして遊ぶ傾向が強くなった。そうした中で被災地から避難してきた子どもや異年齢の存在と交わることが難しく、集団遊びができないという社会性欠如の問題が被災後あらためて浮き彫りになった。

◇住民等からの要望・必要な取組

震災で再認識した科学的な思考を培う活動を地域社会とのかかわりの中で進めていくという意味でも、子ども教室で何か科学的な行事を開催してはどうか。

体制づくり・取組の実施

◇協力を呼びかけた団体・関係者、役割分担

社会教育指導員の専門が理科であるので、放課後子ども教室の中で講師となってもらった。

また、大学の教授や紫波郡教育研究会理科部会会長といった地域で活躍されている方々の協力を仰ぎ、子どもにわかりやすい講座の進め方等を教授していただいた。

◇取組の充実や課題解決のための工夫

講師が一方的に講義をするのではなく、子どもが実際に体験することを重要なねらいとし、創作・実験過程においても楽しんで行うように努めた。

実験に必要な機材等を購入し、子どもたちが実際に手に取って工作実験ができるようにした。また、チラシを作成して、広く活動の周知を図った。

成果・課題や今後の展望

◇これまでの取組による成果

科学的に考え行動する力を育むことが第一のねらいであったが、それと同時に実験をうまくできない子どもを気遣ったり、手伝ってあげたりなど、他者との関係をどのように築くかについても学んでいる。

◇課題や今後の展望

放課後や休日の子どもの過ごし方が今日大きく変化し、インターネットなどメディアの普及により、直接顔を合わせた他者とのコミュニケーションが不足している現代の子どもにとっては、異年齢者など他者との交流や多様な生活体験が可能な地域社会とのかかわりは非常に重要である。今後も教師によって統制された擬似的体験だけでは得られない、生の体験を通して人と交流し、「生きる力」を育ませる活動を進めていく。